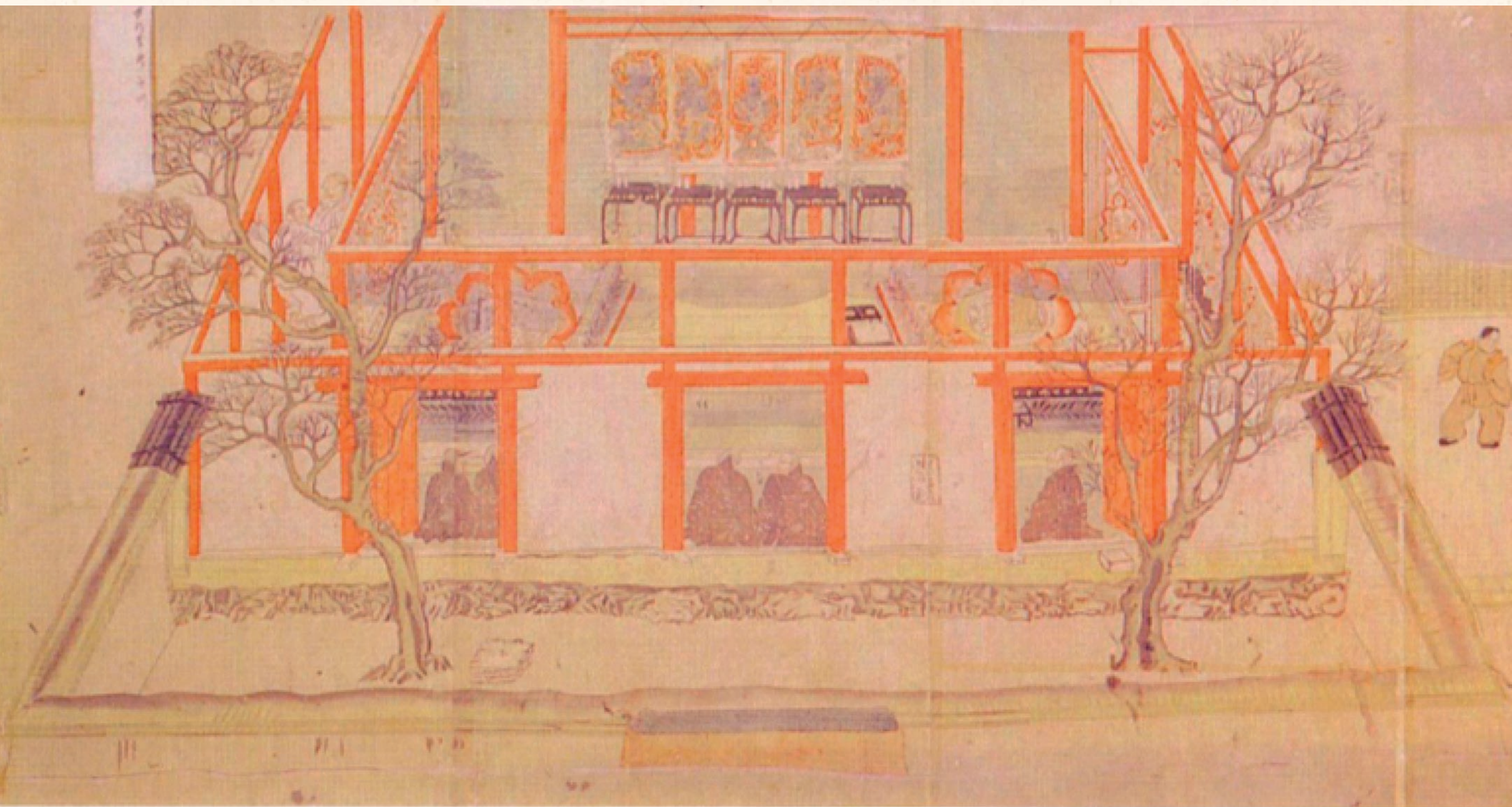




「宮中真言院」 再現の試み

一般社団法人白川学館「祝殿」
令和二年一月八日～一月十四日

「宮中真言院」再現の試み



『年中行事絵巻』に描かれた宮中真言院



五大明王



兩界曼荼羅







目次

1	「宮中真言院」とは	15
2	「大内裏」とは	16
3	「宮中真言院」の建立	17
4	密教の歴史と、両界曼荼羅・五大明王	19
5	宮中後七日御修法の再現	22
	その1、【鎮護国家のための最重要の儀式】	22
	その2、【宮中真言院両界曼荼羅】	24
	その3、【宮中真言院五大明王】	30
6	平成25年、祝殿における、宮中後七日御修法再現の様子	38
7	宮中後七日御修法再現における、七沢先生の〈はふりめく〉講話	40



「宮中真言院」とは

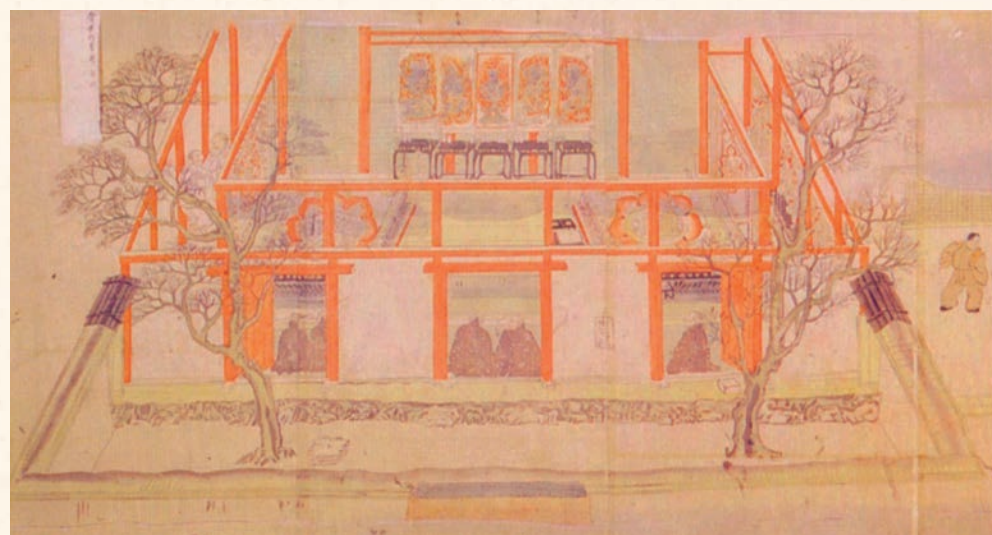


平安京大内裏（平安京）

宮中真言院は、平安京の
大内裏ににあった修法道場
です。宮中真言院、修法院、
曼荼羅道場ともいいます。
834年（承和1）12月、
空海の上奏により、唐の内
道場に擬して設けられまし
た。しかし、明治時代に入
り、廃仏毀釈の影響で、宮
中真言院は失われてしま
います。
宮中真言院で行われてい
た、後七日御修法等の祭
祀は、東寺にて行われるこ
ととなります。

「大内裏」とは

大内裏^{だいだいり}とは、平安京の宮城で、12世紀以降、宮城内の天皇在所である内裏を「大内裏」と表記していました。平安京の北辺中央に位置します。政変や失火の為、たびたび焼失し、平安末期頃から再建されておらず、1227年（安貞元年）にはついに大内裏のほとんどを焼失する火災が発生し、これ以後再建されることはなく、跡地は内野と呼ばれる荒れ地になってしまいました。幕末まで天皇が住んだ京都御所は、1331年に光厳天皇が里内裏^{りうちり}だった土御門東洞院殿を皇居として定めたものです。



『年中行事絵巻』に描かれた宮中真言院

「宮中真言院」の建立

804年、遣唐使の留学僧として唐にわたった空海は、密教の第七祖である恵果和尚に師事します。空海が留学した時代、唐では、密教は全盛を極め、皇帝以下の高官が灌頂を受け、また宮中には内道場^{ないどうじょう}が設けられ、さらに城内、城外に念誦道場^{ねんじゆどうじょう}を設けて、鎮護国家の念誦（修法）が執り行われていました。類まれな才能をもっていた空海は、わずか3ヶ月で阿闍梨位^{あじかりい}の灌頂^{かんじやう}を受け、恵果の後継者としての地位を確立しました。

そして、わずか2年後の806年に、空海は、帰国の途につき、朝廷に対して『請来目録』を提出しました。その目録には、膨大な量の密教經典類がありました。最も注目すべきは、その中に、曼荼羅や祖師の影像を中心に多くの絵画が含まれていたことです。

空海はこれらの絵画について、次のような説明をしています。

“仏法は、本来、言葉をもたないものであるが、言葉でなくてはあらわすことができない。また色や形をもってはいないが、色や形でもって初めて悟ることができる。そして、とくに密教は、深玄であるので、言葉だけではあらわしがたい。よってその不十分なところは図画で示すのである”

6世紀の仏教伝来以来、日本の国内では仏教が広く普及していましたが、そこで制作された仏像はほとんどが彫刻でした。ところが空海によって純密と言われる本格的な密教が請来されると、以後の造像は、絵画が主流になりました。しかし、その後、長い歴史の中で、火災によってほとんどの絵画は消滅してしまいました。

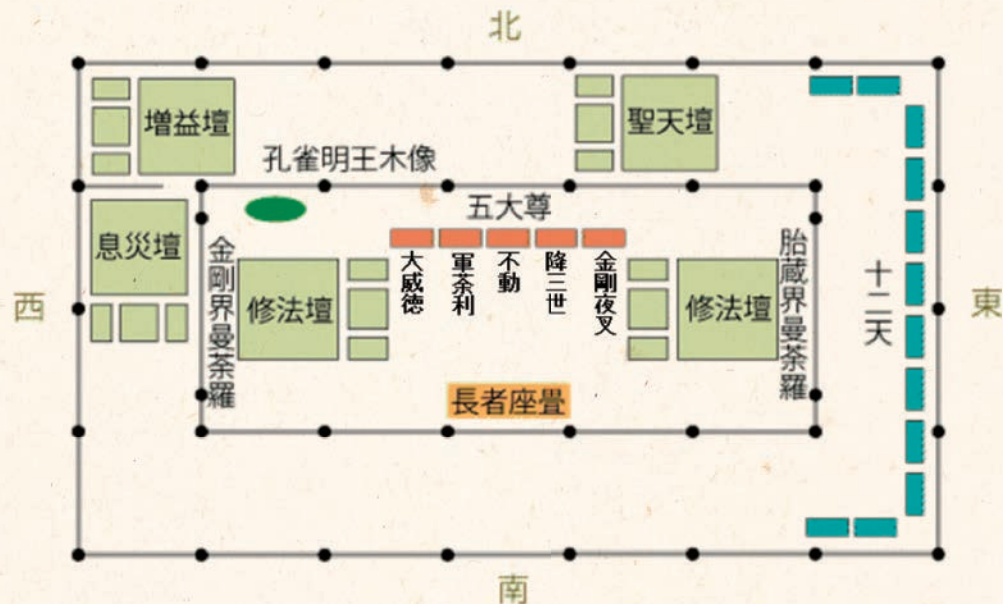
空海は、834年、唐の内道場にあたるものを宮中につくり、真言宗最高の秘儀とされる後七日御修法を宮中で行うことを奏請しました。

それに応じて、平安京大内裏中和院の西に「宮中真言院」が建立されました。

真言院は、両界曼荼羅と共に、五大明王（尊）の絵が掛けられ、大力動を具えた壮麗な空間でした。そして、翌835年、1月8日より宮中で後七日御修法が修されました。この御修法は真言院御修法とも呼ばれ、通称は御修法と呼ばれています。

835年に空海が宮中において、国家安泰・玉体安穩・万民豊樂を祈ってから、毎年、宮中の恒例行事として正月に執り行われていました。御修法は、南北朝時代の戦乱期等に何度か中断しながらも、国家を鎮護する最重要の儀式として執り行われてきたのです。

この最初の御修法から、わずか2カ月後、空海は、入滅しました。享年62歳でした。



平安京大内裏（平安京） 真言院内部

4

密教の歴史と、両界曼荼羅・五大明王

密教の歴史

初期密教（雑密）は、祭祀宗教であるバラモン教のマントラに影響を受けて、各仏尊の真言・陀羅尼を唱えることで現世利益を心願成就するものでしたが、8世紀になると、理論体系化が試みられました。釈尊（Bhagavan）が説法する形式をとる大乘経典とは異なっており、その別名を大日如来と呼ぶ、大毘盧遮那仏（Mahāvairocana）が説法する形で密教経典を編纂していきました。

『大日経』や『金剛頂経』（Sarvatathāgatatattvasaṃgraha）、またその註釈書が成立すると、多様な仏尊を擁する密教の世界観を示す曼荼羅が誕生し、一切如来（大日如来を中心とした五仏・五智如来）からあらゆる諸尊が生み出され

るという形で、密教における仏尊の階層化・体系化が進んでいきました。このうち『金剛頂経』の密教が後期インド密教の主流を形成するにいたり、13世紀初頭に、イスラーム教徒の破壊によってインド仏教が滅亡するまで、密教はとくに北インドのパラ王朝の庇護のもとに隆盛をきわめました。

9世紀にインドからチベットに入ったパドマサンバヴァが伝えた密教は、土着のボン教と習合し、チベット独自の密教が成立しましたが、841年、ランダルマ王が破仏を行い、長い衰退期をむかえます。チベット仏教の復興のために、1040年、インド・ヴィクラマシーラ僧院の大学堂長アティシャが招請されて入蔵しました。アティシャは、西チベットのトリン寺において『菩提道燈論』を著し、チベットで伝道を続け、チベット密教は復興を果たしました。

さらに、14世紀末には、ツォンカパ（宗喀巴）が出て、従来の仏教各派の非道德な面を改める宗教改革を行い、新教黄帽派（ゲルク派）を始めました。ツォンカパは弟子のうち、ゲドウン・トウブパとケートウブ・ジェの二人を選び法燈を伝えたが、前者は観世音菩薩の化身ダライラマ、後者は阿彌陀仏の化身パンチェンラマとして代々転生され今日にいたっています。

こうしてチベットに独自に発達した密教は、清朝の政策と相まってしだいに内外蒙古に広まりました。現在は、チベットを中心に、蒙古、中国の青海省・四川省・甘肅省・西康省、インドのラダク・シッキム・ヒマチャルプラディシユ、ネパール、ブータン、シベリアのバイカル湖南部などに分布しています。

両部曼荼羅の成立

「大日経」と「金剛頂経」を絵図として表現したのが「金剛界曼荼羅」と「胎藏界曼荼羅」で、二つの

曼荼羅で、一対になっています。「金剛」とは、知恵が堅固で壊れないことを意味し、九種類の曼荼羅を一つの絵にしているので、別名「九会曼荼羅」とも言います。「胎藏」とは、人間のもつ菩薩心や、胎児のように慈悲に包まれていることを示しています。

中唐の時代、中インド出身の善無畏（インド名：シユバカラシンハ・639～735）が来唐して『大日経』を、南インド出身の金剛智（インド名：ヴァジュラボーディ・671～741）が来唐して、『金剛頂経』の一部を翻訳しました。金剛智の弟子の不空（705～774）もまた、多数の密教経典を翻訳し、唐密教の全盛期を迎えた。その弟子惠果は、両界（『大日経』『金剛頂経』の密教）を完成し、現図の胎藏、金剛界の両部曼荼羅を完成しました。この両部曼荼羅が惠果の弟子である空海によって日本にもたらされ、真言宗の本尊となりました。その後、唐の密教は、禅や念仏（浄土教）に押されて衰退・途絶しています。

います。

日本では、密教が平安時代前期に隆盛し、五壇法の本尊として五大明王が祀られ、全国各地の寺で、盛んに造像されました。

「マンダラ」という言葉は、もともと密教の絶対的真理、本質を絵図で表現したものを言いますが、今では、一般的に、全体性を持った宇宙観、世界観も意味するようになりました。心理学者のC・G・ユングは、深層心理の象徴表現の一つとしてマンダラ図をよく用いました。ユングは「人の集合的無意識の中から秩序、均衡、全体性を表現した絵図（マンダラ）が現れる。マンダラは聖なる宗教観念や哲学的理念を表現している」と言って心理治療に取り入れ、効果をあげました。

五大明王

五大明王は、仏教における信仰対象であり、密教特有の尊格である明王のうち、中心的役割を担う五名の明王を組み合わせたものです。本来は別個の尊格として起こった明王たちが、中心となる不動明王を元にして配置されたものです。「明」は、智慧の光明を意味し、「王」は、密教において最重要なものとして尊ばれます。明王は一般に忿怒の形相をして

宮中後七日御修法の再現

その1

鎮護国家のための 最重要の儀式

835年1月8日、空海により宮中で後七日御修法が修されました。空海が宮中にて、国家安泰・玉体安穩・万民豊樂を祈ってから、毎年、宮中の恒例行事として正月に行われるようになりました。

御修法は、南北朝時代の戦乱期や応仁の乱以後などに何度となく中断しながらも、明治維新まで国家を鎮護する最重要の儀式として執り行われてきたのです。

国家を鎮護するための最重要の儀式

後七日御修法の意義

- 1、『国家安泰』 国家が安泰であること。
- 2、『玉体安穩』 天皇の身体がやすらかであること。
- 3、『万民豊樂』 全ての万民が、豊かに暮らし、生きることを楽しむこと。

後七日御修法の歴史

835年1月8日、宮中にて空海により鎮護国家のために執り行われる。南北朝時代の混乱等により度々中止。
 応仁の乱後は、170年に渡り中止。
 1623年1月8日、後水尾天皇の尽力により復活。
 1871年（明治4年）に廃仏棄釈の影響により廃止。
 1883年（明治16年）1月8日釈雲照らの嘆願により東寺にて復活。
 現在、宮中では、後七日御修法は、執り行われていない。

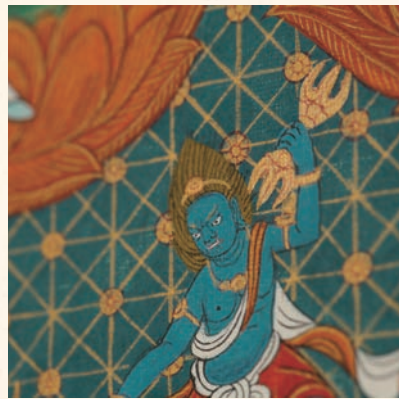


胎藏界曼荼羅 (右)
金剛界曼荼羅 (左)
外寸: 1910 mm × 2100 mm
作: セラブ・シェルパ氏 (ネパール)
所蔵: 七沢賢治



胎藏界曼荼羅 (右)
金剛界曼荼羅 (左)

その2
宮中真言院
両界曼荼羅





胎蔵界曼荼羅絨毯

金剛界曼荼羅絨毯

外寸：2900mm × 3100 mm

製作地：イスファハン（イラン）

所蔵：七沢賢治



絨毯 裏面 ドット絵のようになっている



絨毯 表面



五大明王絵（Ⅴ）

五大明王絵（Ⅲ）

五大明王絵（Ⅰ）

五大明王絵（Ⅱ）

五大明王絵（Ⅳ）

五大明王絵 全て
 外寸：880 mm × 1440 mm
 作：セラブ・シェルパ氏（ネパール）
 所蔵：七沢賢治

（右から）
 金剛夜叉明王
 降三世明王
 不動明王
 軍荼利明王
 大威徳明王

宮中真言院五大明王

その3

密教では、大日如来の化身として、明王の中で最高位を与えられています。
五大明王の中心です。



阿閼如来の命を受け、不動明王の次格となります。金剛薩埵菩薩の化身。
過去・現在・未来の三世と、貧、瞋、痴を降伏させることから名がつけました。



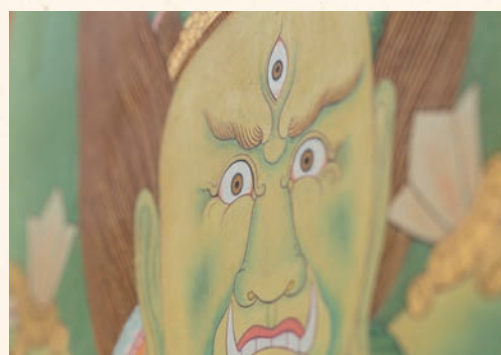
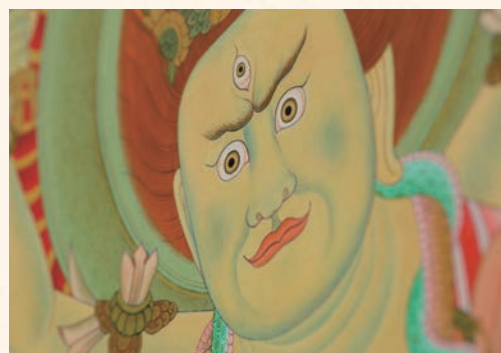
宝生如来の命で、疫病をもたらし毘那夜迦天を調伏する明王です。



不空成就如来の命で、敵や悪を喰らい尽くして善を護る、聖なる力の明王です。



阿弥陀如来の命を受け悪の一切を調伏させます。



6

平成25年、祝殿における

宮中後七日御修法再現の様子

ごしちにちみしほ



護摩供養

後七日御修法

式次第

- 一、祓詞修祓
- 一、降神
- 一、麗水加持
- 一、散紙散供
- 一、點火修法
- 一、中匠祓念らびに祈願文奏上
- 一、鈴の祓い
- 一、神道護摩
- 一、鳴弦の行儀
- 一、玉串奉奠
- 一、送神



【宮中後七日御修法】再現における、

七沢代表のへはふりめく講話

目次

へはふりめく講話から…	42
0309 話…2018 年 1 月 7 日	42
へはふりめく講話から…	44
0310 話…2018 年 1 月 8 日	44
◇後七日御修法での代表挨拶	44
◇密教の戦闘的強さをとりいれた	44
◇両界曼荼羅というシステム	45
◇十二神将の図	46
◇仏も元々は神	47
◇機置神 はたおかしのかみ	48
◇貨幣価値としても高価なもの	48
へはふりめく講話から…	50
0652 話…2018 年 12 月 11 日	50
◇H さん	50
◇あれはネパールの絵師が描いたんですね	50
◇もともと天皇の玉体の安寧と、国家安泰を祈るために	51
◇ちょうど中間のようなものが曼荼羅だと思うのです	52

へはふりめく講話から…	55
0680 話…2019 年 1 月 10 日	55
◇Y さん	55
◇御所の一角に宮中真言院があった	55
◇五大明王と両界曼荼羅に囲まれてお祓いをあげたら	56
へはふりめく講話から…	58
0684 話…2019 年 1 月 15 日	58
◇天皇の玉体の安寧 あんのん を祈る	58
◇斑駒 まだらこま と曼荼羅	59
◇命の源を五行、五大明王と解釈した	60
◇〈父韻と母音と子音〉生成の概念	60
◇空海の真言	61

明日、五大明王祭祀がありますが、これも五行であるし、〈あいうえお〉なんですね。真言ということになります。神の言葉になります。空海さんは唐から2つのマンダラを持ってきましたけれども、その大元は真言ということになりますね。それで、明日から一週間、五大明王と胎蔵・金剛／両界曼荼羅を祀るのですけれども。それを言葉の元の母音の五音であり、父韻の八音でありとか、そういうものの組み合わせですね。もちろん、五十音というものの、言葉の最小単位ができるということは、物が作られていく元になるということが、一つの歴史なのですけれども。

今、我々は言葉の最小単位を父韻、母音、子音という一音から、更に細かくしていくのか、言葉というものをより精緻に言葉の最小単位を一段階、細かくするというをしているわけですが、そういうことで、今、新しい時代にあつた言葉、あるいは言語というものが、古事記の中から、神々の名前・働きを探してきて、その暗号を解いて、そして、父韻の神、母音の神、子音の神というね……。もちろん、有性生殖は三位一体で、キリスト教のように三位一体が、聖霊というゴーストになってしまふ場合もありますね。日本語はそこが非常に簡単で、父韻あるいは母音、子音という組み合わせで音が発生することになっています。それは変わらないのですけれども、それを古事記の中で、そういう五十音というものを探ったものが言葉ということになります。

言葉というのは、五十音の元だということは、それは神という名前になっていたところが非常に隠されていた内容ということになるのですけれども。今度は父韻というもの、母音というもの、子音というものが古事記の中に隠されていたということが分かってきたわけですね。それを使って、一つの時代にあつた伝え方ができるのは、古

神道の良いところというかね。定義しなかったから、その時、その時代で伝えるということを、気付いただけを伝えるということができたということだね……。

ですから、仏教というものが入ってきて、それをしっかりと取り入れて、そして、その宮中真言院という形で、五大明王を器教として、その五行、〈あいうえお〉を伝えるということも可能になるということですね。神道の連続の中で伝えるということが可能になったということが大事なところですね。

◇後七日御修法での代表挨拶

お楽しみにしてください。だいたい、この絨毯のマンダラが、この絨毯を織ったのがイランのイスファハンで、東アジアと西アジアが、シーソーゲームのように東アジアが平和になると中近東が戦争になるという、こういうシーソーゲームになっているんですね。今、東アジアがオリンピックの前であるけど、正月から金正恩主席が平和戦略をとっていますけれども、あそこまで持っていくまで彼らの戦略でも、まあ、それはそれとしておいて。

◇密教の戦闘的強さをとりいれた

ちょうど、この五大明王も勇ましいというかですね。元々これは密教というのは7世紀ぐらいの、イスラム教と同じぐらいの歴史で、仏教の中で密教は始まったんですね。イスラム教はコーランか剣かどっちかをとれというふうにやってきた。要するに、インドあるいはアジア大陸では、争いのさなかにあったのです。ですから密教は、先鋭的戦闘的宗教であつたわけです。五大明王は、ほとんど剣とか武器を身に着けている姿をしていますね。しかも手もたくさんあるし、そういう何というか非常に戦時的というか。

それをその部分の強さを、神道は借りて取り入れたということですね。後七日御修法という、正月の七日は白川でやって、あとは真言密教でやるというか、玉体の安泰、健康の問題と祖国の安寧というんですかね、そういうことを願っ

てお祭りするというわけですけども。言ってみれば、この仏教は、非常にこう戦闘的な密教にあるんですね。木火土金水の金なんかは金属を手を持つ武器として、説教者が敵に対して投げつけるものが、密教の法具ですね。金剛杵こんごうしよの独鈷杵どっこしよ、五鈷杵ごこしよなどありますが、もちろん仏様に心の煩惱を打ち砕く法具としてお祈りすることがあるのだけども。一方では投げつける戦闘用具としても存在するんですね。

ですから、思いつきり名前もそうですよね。軍荼利明王ぐんだりみょうおうとか、大威徳明王だいいたくみょうおうとか、五大明王というのが、そういう軍とか戦闘に関わるような名前が付いているんですね。そういう部分を神道がお願いするということになったんですね。だから大元帥明王というか、国と国土を護る場合には、絶大な功德を発揮する、まさに戦闘の時、先頭に立つ人たちのそういう名前が付いているんですね。

◇両界曼荼羅というシステム

この両界曼荼羅は、だいぶ落ち着いてから出来たものというかですね。哲学的な表現と言うかですね、宇宙全体と宇宙の始まりというようなものを、金剛界、胎藏界ということにして出来ておりますけれども、胎藏界の真ん中の八仏の下に五仏がありまして、これが五大明王ということになると思うんですね、そういう名残があるんですね。

この二つの曼荼羅を空海さんが唐から持ってきたんですね。これは宇宙の一つの働きというか、システムのようになっているわけであって、それで日本に密教の両界曼荼羅が一つのシステムとして千年以上前に入ってきた。そしてそれを記念して、またコンピュータの中にそういうビジネスマンダラという形で体系付け出来たということもあったんで、これを記念して、ネパール密教の聖地にお寺を寄進したんですね。その時にはギアナ・マンダラ・ビハラとして、知識山曼荼羅寺というお寺を建てて寄進したんですね。その時に、五大明王とか絨毯も作って、ネパールで描いたり、あるいは作ったものをイランで織ったわけですね。

◇十二神将の図

宮中真言院は、もう一つ、十二神将の図があるんですね。十二神将の図があつて、全体になつていらっしゃるんですね。皆さんご存知のように、修験でも九字を切るといふ、「臨・兵・闘・者・皆・陳・烈・在・前」という指で作るんですね。それも一つの五行あるいは、マトリックスな訳ですね、そういうものを作るけども、やっぱり、臨・兵ですかね、この兵に臨むということで、九字を切っていくということが、非常に正統的だということが密教の特徴ということですね。

それが、平安時代に、空海さんが天皇を御守りする為に、宮中真言院を作つたという、神道の弱い部分というか、神武天皇が、まさに、神の武ということで、一種の王道から覇道を取り入れるということを、ある意味、宣言しているんですね。やっぱり、外国との戦いとなると、どうしても不安だつたんでしょうね。それで、真言の五大明王を祀る、後七日御修法というものが出てきたのではないかと、言えるのではないかと。

元々これは、五大あるいは五行から発達したというか、宗教もユダヤ教からキリスト教、キリスト教から流れとしてはイスラム教というかですね。どうしても、だんだんと後になつて出てきたイスラム教が強かつたからですね、それでも対抗する為、ということになるんですね。

やはり、日本でも神道で戦うということは、どうしても、強くなるという方法は、ある面では日本のちょうど戦前の時に、神道を国教化して、国を強くするようなことをして、富国強兵の国家運営がなされたこともあつたわけですから。

やはり、仏教の密教の強さを借りて、国の経営を行つたのが、平安の頃ではないのかということですね、それが名残として絵の中にある、と。来振寺きぶりじというお寺の国宝の図像のものを、ネパールでもつてもう一度デフォルメして書き直したものが、この図柄なんですね、何れにせよ、非常に強いといふかね。

◇仏も元々は神

今回、我々もある面では、段々と組織もあるいは大きくなって、みんな、小さい組織の時は考えもしなかつたけれども、そういう呪詛が発せられてきた時に、そういうものに対応して、真言の五大明王の威徳といふか、威力といふか、そういうものを我々も身に受けて、そして身を守つて、健康やそれから呪詛に対して対応するような形で、お力添えをいただきましたよということになると思いますけれども。一番の基本は、言霊といふか真言ですから、言霊ということになるんですね。ですから、その言霊の五十音、母音・父韻・子音の有り様というものが、一番はつきり現れているのが、両界曼荼羅であるし、五大明王ということになるんですね。五大明王も、さうとう地水火風空の五大ということであるけれども、五行の木火土金水が、そのまま明王になつたのではないかと思ふんですね。

それはやっぱり、母音の響きといふか、ですから、すべての明王の後ろにある、火炎というものがありますけれども、これは火だけではなくても、一つの周波数、木火土金水の周波数がそのまま、地球全体になつていふことの表現であるし、それが「あいうえお」であるということになるんですね、ですから、五大明王といふものが、一つの母音の働きをしてですね、八父韻にあたるものが、胎藏界のものを生み出す時の仏さんがあつて、ちょうど下の五と上の八が掛け合わされるような形で音図になつていて、その働きが広がっていく時の離散していく時の働き、その言葉の働きが仏様になるんですね。

それが、定まつた宇宙が定まつた時に、この金剛界というですね、もう壊せない形で、宇宙が出来ましたという時のものが、この9つのマトリックスの絵図ですね・・・、あるいは、真ん中が大日如来ですから、それ以下は8つということになりますけれどもね、広がっている宇宙の全体をマトリックスにしたということになるんですね、要するに、それらの働きの一つひとつを我々が、神の働きをお願いするように、それが仏という形の、まあ、仏も元々は神なんですね。ですから、神の働きを仏として描いてあつて、そして、それが神道の神様と同数の仏様があるのでは

ないか、と。基本数は、ですね。

◆機置師神はたおかしのかみ

もちろん、人間には眷属けんぞくというものがありますから、外々陣げげじんにはそういう働きを、仏の働き以外のものも沢山あるということになるんですね、こういう言葉が強い働きを持つということで、我々はそれを機械に置き換えてやったと、それを機置師神はたおかしのかみというふうに名付けるということも、それが天にあると天機置師神あめのはたおかしのかみというふうになりますね、そして、地では機置師神というようなことで、一般的には機置師神というふうにしましょうと。そして、それをロゴストロンというような形で、作っていますよということがある。ですから、機械も宇宙論に基づいて、胎蔵界と金剛界という宇宙論に基づいて作っていますよということで、やはり、これを掲げるということは、こういうことの表現であるというかですね、そういうことに繋がっております。

◆貨幣価値としても高価なもの

この金剛界・胎蔵界曼荼羅も、20世紀までの一番の労働とか、素材も絹とか、ウールとかありますけれども、一番の貨幣価値でいうと一番高価なものが、労働の集積とその材料と芸術性というか、工芸性とかそういうものを含めたものとしては、一番評価されるべきもので、一番高価な一つの貨幣価値として、表現しても価値の高いものになると、こういうことが言えると思うんですね。こういうものが文化的あるいは芸術的な価値として、ここに作られたということは、シルクロード始まって以来のものではないかと思えますけれどもね。そんなこともありまして、これをご神体としてですね、いつか宮中真言院ができる時がくるといいですねと、そんなことで今日は、お話をさせていただきます。

ありがとうございました。

◇Hさん

ちよつと前々からお聞きしたかったのが、母屋の方に金剛界曼荼羅と胎藏界曼荼羅が飾ってありました。私、密教にけつこう縁があつて、あの辺は、よく修行で使わせてもらったのですが。なぜ神道のところに、金剛界曼荼羅と胎藏界曼荼羅が飾ってあるのか、ということが前々からお聞きしたかったのですが、そこら辺の関係性とか、先生があそこに飾っていらつしやる意味をお聞かせ願いたいと思います。

【七沢代表】

◇あれはネパールの絵師が描いたんですけどね

あれはネパールの絵師が、シェルパ族のセルパさんという人が描いたんですけどね。あれはシステムの統合ソフトを作っていた頃、空海さんが1000年前に持ってきたものはシステムというか、密教ですけども、システムで出来上がっているというのを突き止めたというかね。曼荼羅の一つのシステムをソフトで考えて、そしてそれ以来、それを記念して、絵を描いてもらったんですけども。その絵が特別な書き方というか、日本の絹本けんぽんというか、絹に初

めて描いた。

普通は、向こうの人は、コットンに米の蒸した粉を塗って、その上に描くのが曼荼羅の描き方なんですけどね。あれは特別に日本の絹本の曼荼羅なんです。それで胎藏、金剛の両方が、そういうシステムということで作ってもらったことがあったんですけど。その時に、初めて練習をしたのです。あの二枚を作るのに本当に命がけて描いたということだったんですけども。その後、ネパールのお寺を、そういう日本に曼荼羅でシステムができたから記念して寺院を寄贈したんですね。それは、知識山曼荼羅寺とか、ギアナ・マンダラ・ビハラというお寺を寄贈したことがあったんですね。今もありますけども、カトマンズに。

1000年前に日本でも宮中真言院というのがあった時に、そこに飾る胎藏・金剛／両界曼荼羅も、実は描いてもらったんですね。これはコットンの上に書いたものですけどね。

◇もともと天皇の玉体の安寧と、国家安泰を祈るために

毎年、一月八日から、ここ祝殿で一週間飾るんですけどね。五大明王と両界曼荼羅を飾ります。もともと天皇の玉体の安寧と、国家安泰を祈るために、平安時代の末期は白川で正月の一日から七日目まで、正月の祈りをして、その後、真言が、後七日御修法ごしちみしほと言って、その後の七日間を宮中真言院で祈るわけですよ。

これは祈りのリレーになっっているわけですよ。日本の国を守るための祈りのリレーで、白川と真言が、天皇の玉体と国家の安寧を祈るということをするわけですね。宮中真言院は、明治の頃、京都の東寺の中に移したのがあるんですけどね。この中に、そういう両方の設えしづゑをして、お祀りをしています。真言の場合は、大阿闍梨というのは、教導大阿闍梨といって、いわゆる根本中堂のある、延暦寺の千日回峰行をした大阿闍梨ではないんですけども、そういう方がこのお弟子になつて修行されたこともあります。

これらを祝殿と一緒にするのはなくて、宮中真言院の形で、やりたいということは希望としてあるんですけどね。

ですから、一部は、その姿をカトマンズで下請けしてもらおうとか、失礼な言い方ですけども、ネパール密教の坊さんたちに、そういう色々下請けのような祈りを20年くらいしてもらっていたこともあったんですけど。やっぱり日本でそれをした方がいいんじゃないかということがあるんですけどね。ですから、その時の曼荼羅、ビジネス曼荼羅という特許にして2000年になる前に、そういうものを作っていたんですね、母屋に飾られているのは、その時に記念して描いてもらったものです。

真言ですから、真言の胎藏界の中に八葉というか、真ん中にある仏様と、その下に五大明王があるんですけども。これが母音と父韻の八というんですね。こういうもので、言霊を表しているというのが、まさに真の真言ですね。あとはその階層が、心の階層を仏の階層として表記されているところもあります。あの時代に、千年前ですね、既にそういう密教自体ができたのは、西暦700年代ですけども、そういう時に、既に階層性と言霊という、そういう意味合いのことが象徴として描かれているということは高度な文明と言いますかね。

世界の三大権力というか、カトリックとフリーメイソンと密教というのは、今から四、五十年前は、世界の三大権力と言われたくらい、密教というものはアジアに広がったんですね。そういう経緯もありますけども、非常に科学的と言うんですかね、そういうところがあるんじゃないのかなということ。

我々は別に真言宗ではないんですけどね、日本に大きな学問のそういう階層性の学問と言霊の基本になるものが詰まっているということで、今でも大切に思っただけ飾らしてもらっているんですけどね。

◇ちようど中間のようなものが曼荼羅だと思うのです

これからは多分VRなんかで、金剛界曼荼羅も人間の意識がこの悟りというか、そういうものも含めて本質に入っていくための一つの道筋みたいなものだから、それ自体がVRのようなもので、できるんじゃないのかと。その真実に入る道が、VRで作れるんじゃないのかということで、これからやっていただくということになると思うんです。

ですけどね。そんなことがありまして、非常に古いようで新しいというか。あるいは、一番、煌びやかなものと言いますかね、それが、曼荼羅の中のさらに曼荼羅である、この胎藏・金剛の両界曼荼羅が、一番、雅というか、煌びやかなものというんですかね。

極彩色というか、そういうものでありますけども。実は、ペルシャ絨毯の曼荼羅の大きなものがあって、それもイランで織ったものがあるんですけども。これは、だから二十世紀の最後の貨幣経済の最終形の姿が、そういう密教の曼荼羅で絨毯として織つてあるというかですね。煌びやかさというのは、やっぱり人が見ている自然が、オーロラとか、そういう自然の美しさというか、光の美しさを七色の虹が、はっきりと強く出てきたようなものもありますけども、そういう二種類の光というものの、ひとつのちようど中間のようなものが曼荼羅だと思っんですけどね。

宇宙が出来上がる時の光と、宇宙が出来上がった後の光と、そして、その間にある自然を照らした光も、それが曼荼羅というような色に表現されているのです。ですから両方に、宇宙のはじまりの光、あるいは宇宙の今、満たしている光で、自然というものを反射している、いちばん煌びやかな光を表現したものが曼荼羅ということになると思っんですけどね。

ですから、その曼荼羅は、その両方に行けて、それをつかむことのできる、そういうものとして表現されて、それを飾るものというんですかね、悟りを得るものということではないかな、と。禅の対極にありますけども、仏教の中では、そういう世界もあって、それを極めると、そういう元の世界というんですかね。光の世界というか、そういうところにもつかむことができる、そういう一つの道筋なんじゃないのかな、ということですね。

一見、神道におけるまったく煌びやかさのない自然というものと、一方では、極め付けの極彩色の自然というものが極にあるんだけど、それを極の中でまた、その世界というんですかね、宇宙創造の世界を知ることが可能になるんじゃないのかと。ですから、工芸とか美術とかいうんですかね、精緻なそういうものとのちようど両方を満たしている、あるいはそこから始まるというんですかね。これはものづくりにもなるし、美の探求の芸術にもなっていく、その源にあるものが、こういう神道と密教の対比というか、そういうものであったり、あるいはそういう曼荼羅とい

うもので始まる世界があるのではないのか。一つのそういう思想が悟りというんですかね、そういう宇宙創造のところに行き着ける、悟りのところを感じられるところを表現しているもの、というような意味で言えば、意味があるんじゃないのかな、というようなことを感じますけどね。

04

はふりめく 講話から…

0680 話…2019 年 1 月 10 日

◇ソさん

今、後七日御修法ごしちにちみしほの期間中（一月八日～十四日）ということで、金剛界曼荼羅と胎藏界曼荼羅と五大明王が飾られていると思うのですけれども、なぜ、この金剛界曼荼羅と胎藏界曼荼羅と五大明王を、後七日御修法の時に飾るのでしょうか？

【七沢代表】

◇御所の一角に宮中真言院があった

宮中真言院の伝統も、随分と途絶えていた時期が長くあるんですけども。神祇官と並んで仏教の中でも、特に真言というんですかね、それが国家安泰というか、玉体安穩ということで、国の行事として祈られていたんです。この形は、宮中真言院の形というんですかね。御所の一角にそういう場所があったんですね。一部は、田中家文書もんじょの中にあつて、それを見ますと、やはり胎藏・金剛を合わせるようになっていて、正面に五大明王を祀っている形があるんですね。御所にあつた時から、明治になる時に、京都の東寺、五重塔がある有名なお寺に、今は安置されているんですね。それを安置したお坊さんの家系の方と話をさせていただいているんですけども。

そんなこともありましてですね。この絵図自体は、御所にあったものを原寸大で作っているんですけども。この絵図は、最初は天台宗であって、あと真言になった来振寺きぶりじというお寺の国宝の五大尊像ですけども。それをベースにして、ネパールの釈迦族の絵師が、これを描いてくれたんですね。この胎藏・金剛も、カトマンスで描いていただいたんですね。結構、時間が、6年くらいかかったかな。特に、五大明王と両界曼荼羅というものがベースになっているというのは、宮中真言院が狭いお寺といったらあれですけども。御所の中ですから、大伽藍だいがらんのお寺というわけにもいかないから、宮中真言院という形で、狭いところに全体を入れるということで、大変だったようなんですけども。神道と仏教を明治の前までは、神仏習合といって、一緒に祀られるというケースもよくあつてですね。神宮寺とか、そういう神様と仏様と一緒に祀られる場合というのがよくあつたわけですけども、明治以降、神仏分離で分けたということにはなるんですけども。

◇五大明王と両界曼荼羅に囲まれてお祓いをあげたら

今回も、このように両方に取り囲まれて、五大明王と両界曼荼羅に囲まれてお祓いをあげると、どんな気持ちになるかなと、皆さんにお聞きしたいようなところもありますけどね。今の時代では、もちろん、神、仏を、別々に祀ったり考えたりするんでしょうけども。

昨日もお話しましたように、岡潔先生なんかは、仏教を九識にして、その境地を「真如」としています。十識が神道、古神道では「真情」であるというような、そういう意識の分類をされています。五体の5つの五感というんですかね。それから、意識があつて、その先に、末那識まなしきがあり、阿頼耶識あらやしきと続く、またそれに仏教の意識、「真如」が九番目で、神道の「真情」が十番目であるというような、そういう「九・十」というかですね。意識の最終形を、仏教と真如というものと、それから真情というものが、古神道の真の情緒というもので、体系づけられたわけですけども。

まさに、そういう面では、「九・十」というか、仏教の世界の意識と真情というんですかね。それが同時に表現したら、手助けになるというかですね。我々は、その神と人が、一如になる方法をご修行で提案しているわけですけども。

◇天皇の玉体の安穩^{あんのん}を祈る

おはようございます。まだ後七日御修法の展示で、日程ではもう終わっているんですけども、連休だったから、まだ片付けてないのでそのまま飾ってありますけども。古神道の白川と真言が、どうして関わるのか。去年までは、歴史的には御所の中に、白川と宮中真言院があつてというような説明で終わっておりましてけれども。今年は、ちょっと踏み込んで色々言わせていただくというようなことで、「えっ？」ということがこれから毎日出てくるかもしれませんけども（笑）、ご容赦願いたいと思っております。

本当は歴史の中では、既に、展開されたり、はっきりと絵図にしてあったり、祝詞にしてあるわけですから、その事を強行してしまえば、「これは神道だとか、これは仏教だとか」いうことになるんですけども。真言も白川の古神道も、両方とも本当は皇室祭祀ということになるんですね。共通点を言ってしまうばですね。それは国家とか、あるいは、基本的には天皇の玉体の安穩^{あんのん}というか、それを祈るという意味合いがまずあるんですけどもですね。実はそういう真言ですから、それは仏教の宗派の名前じゃないかというふうに思われてしまうかもしれませんが。

我々も、今度作ろうとしているのは白川曼荼羅^{まんだら}といって、白川の知から曼荼羅の形で製作しようというんですかね、具象というんですかね、神の実体を表現するというふうに言っていると思うんですけども。

◇斑駒^{まだらこま}と曼荼羅

白川と真言は皇室祭祀であるということと、そして、それは、言葉という共通性があるんですね。我々はそれをお祓^{はら}いも、あるいは和歌も、まさに言葉というか、まさにそれは言霊^{げんれい}や言魂^{ことたま}というような言い方で、長らく言い伝えられてきたものというこでの共通項があるわけですね。ある面では、もちろんそれは曼荼羅ということで、両方ともシステム体系でもあるんですね。神道の祝詞の中には「天の斑駒の耳振立て聞興し召せと白す（あめのふちこまのみみふりたててきこしめせとまをす）」という言い方があるんですけども。要するに馬が栗毛というよりも白と黒の、ぶち^{ぶち}というか、斑駒（ぶちこま／まだらこま）という表現になっているというか。それで曼荼羅も斑駒からきた、という言い方もあるんですけどね。

マンダラ（曼荼羅）は、インド語（巴語・パーリ語）でもあるんですけども、一方では神道が合わせようとして言ったのか、あるいは、元々、同じことだということを言ったのか。とにかく、曼荼羅の絵が、斑駒に見えたということでしょうね。ですから、仏教と古神道、あるいは神道を融合させた修験道のような、そういう動きが出たのも、基本的には真言宗が出てきてから特にはっきり色々出てくるわけですね。それ以前はどちらかというと、仏教と神道がなかなか合わないものじゃないのかな、ということで、混合、融合させなかった。佛経典にも神道と合う経典と合わない経典というのがあつてですね。真言宗だけではないですけども、必ず仏教の根拠根本の教えになる法華経なんかは、ある面ではそれを神道の教えに合わせるというふうな試みがあつたんですけども。その中で特に、言霊^{ことたま}あるいは言魂^{ことたま}というようなものは、どこに共通項があるかという法華経で言う「言辞^{ごんじ}の相」というんですよ。

いつも言うように、法華経は「相・性^{しょう}・体^{たい}・力^{りき}・作^さ・因^{いん}・縁^{えん}・果^か・報^{ほう}・本末究竟等^{ほんまつくきやうとう}」というような、そういう言い方がありますけども。

◇命の源を五行、五大明王と解釈した

一つの、もともと相の中に言辞の相、すなわち、言葉の相があったんだというような捉え方になるわけですけども、それを、五大明王と両界曼荼羅というもののでの共通項は、ある面では五大明王は、木火土金水（あいいうえお）でもあると。

両界曼荼羅の中には、その一枚一枚が、宇宙創造のはじまりの時の生成図として創出されていく時の胎蔵界と、それから宇宙が最も硬い金属か、金剛石（ダイヤモンド）のように、しっかりとできた結果としての金剛界ですね。ですから、人がその真ん中に入って修行するというような捉え方をする場合もあるんですけども。要するに、ユングなんかも、そういう曼荼羅というようなものを個人個人で描いて、そして、それを自分の心、精神の発見とか、自己を省みる時の指標にするというふうに捉えていたようですが、神道的にみると、これがそういうすべての始まりの存在としての造化三神ではないけれども、造化と創られた結果というような・・・。

とくにこの地球というか、人間の中に現れている命というものの源を五行というんですね、五大明王というふうに表示したという解釈だけではないんですけども、そういう捉え方でいけば、それが存在の概念をつくる大事な要素というものですかね。もちろん、その概念もまた、実体から具象、実体概念、具象概念というか、そういう概念の移行があると思うんですけども、こういう具象の形とすることで、その出処をまた理解しようというような元の抽象的な、まだ力オスになっている部分を知る、宇宙の創造の元を知る、というようなそういう見方も出来ると思うんですけども。

◇〈父韻と母音と子音〉生成の概念

長い歴史の中で、培ったものをあまりこう、捨象して言ってしまうと語弊がありますけれど、歴史の中で学んでき

た事というのは、そういう日本語というものの、あるいは言語というものを創り出す元にある「あいいうえお」を、あるいは我々が今はそういう子音と言う形で、母音と子音だけで捉える言語学の方法からですね。いわゆる有性生殖の父、母、子というか、そういう命の生成の三角形から物事が出現したというような、そういう一種のアナロジーをとるかもしれませんが、そういう目で見ると、父韻という音の、より最小単位で言語を分解していくときに出てきた、そういう概念といってもよいのかもしれませんが。今までの言語学で考えると、母音と子音しかないということなんですけども、そこを階層化させて、父韻と母音と子音という、そういう出来方をしているんじゃないか、という概念を新しく加えていくことですかね。

確かに人の声は、最初、母音だけというか、そういう「あゝ」とか「うゝ」とかいうものからはじまったのかもしれませんが、あるいは鳥の鳴き声のような高周波から学んだ、そういう音、音色が元になっているかもしれませんけども。そういうものが、だんだん普遍的に構成されてきて日本語という言語が生まれてきたのではないか。実は真言の中にも、父韻と母音というのがはつきりと、よくみると、胎蔵界曼荼羅の中に表現されている。父韻の八個、あるいは九個と言いまじょうか、それと、五母音が合わさって出てくることが、はつきりとこのエニグマタ（創生図象）の中に描かれているし、そしてまた五行の音色である、「あいいうえお」も出ているわけですね。

◇空海の真言

それを空海さんは、皇室祭祀の充実のために、嵯峨天皇（52代：786年～842年）に問われたときに、「真言も同じものです」と。「日本の古代から言い伝えられた言霊^{げんれい}あるいは、その神々の世界と同じものです」ということを、多分、天皇陛下に伝えた、ということなんです。ですからそれが後々の、いわゆる伊勢の教え、なんかも両界神道と言って、真言と神道を一緒にした教えでできるようになっていくわけですけども。その時に空海さんは、『阿（ア）字義』とか、『吽（ウン）字義』の母音を説き、日輪観、月輪観^{がちりんかん}とか、そういう観想法という鎮魂修行です

かね、そういう瞑想法の類も加えていくんですけどね。どうもそういうものが、その時代にまだ十分理解されることがなかった。千年前ですからね、理解されないで、どうしても信仰というか、仏への信仰という形で民衆を指導するというような、そのために使うのに不都合だということで、まだ言霊のもとになるようなものを十分理解されなかった。

空海の真言は、いわゆる教えとしての仏教、信仰としての仏教というよりも、本来は真理を説くための、そのための根本の学問というような位置付けになっていったのではないのかというか。そのことをまだ十分顕せないから、顕と密でいうと、密ですね。密教という形で教導していったのかもしれないと。仏教の教義や信仰の議論をしたくないと言っているわけではないんですけども。宗教ではない、というふうなところにくる可能性が随分あったから、これはなかなか、あくまでも、いわゆる具象的なものにして、逆にそれを密教として伝えるというふうなことになるというかですね。とくにこの胎藏・金剛／両界曼荼羅と五大明王を選んで、宮中真言院として宮中祭祀の一つの形、最小単位にして伝えたのではないのかなと思うんですけども。

今こそ、そういうことの真実が開顕するということかですね。それを我々も白川曼荼羅という、表現方法を使っているんですかね。それが実は非常にシステムのな、そういうものが千年前に日本にもたらされて、そして、その神道というものを理解する一つの縁にしていたのではないかと。そしてその千年間というものが、ある面では七草粥ではないですけども、そういうホトケノザというふうな、そういう七草の表現もありますけども、そういう形で伝えられたという。

今、それをもう一度、解く（ほどけ＝ほとけ）というか、で、实体概念や具象にしてあったものをもう一度、原理を説明する。そして、そこからシステムのな装置を作り直すというような意味があつて、ここまで伝わってきたんではないのかな、と。それをより明確にこれからは説明知をもつて表していくというふうなことが必要になってくるんじゃないのかな、ということが考えられましたので、そんなことをお話させていただきました。

※これらは、2018年～2019年における、後七日御修法の祭祀・展示のときに〈はふりめく〉で
講話された七沢代表の言葉を抜粋・まとめたものです。



「宮中真言院」再現の試み

令和二年一月十日 発行

発行者 一般社団法人白川学館

〒四〇〇-〇八二二

山梨県甲府市里吉四丁目八番三十五号

電話番号・・〇五五-244-5585

E-mail info@shirakawagakkan.jp

本書の無断転載、複製、複写（コピー）、翻訳を禁じます。

